



オピニオン
進化からシニアを考える(4/9)
SCE・Net 中安 一雄

O-42

発行日：
2026年3月18日

本稿は「進化からシニアを考える(3/9)」に続くものです。

6)-4 和を尊ぶ

日本人は聖徳太子の昔から「和を以て貴しとなす」(17条憲法)として、周囲のことを考え、社会の和を大切にしてきた。和が平和な社会を作る基本であるとしたのである。

これは、自分が良ければそれで良し、としない考え方である。周囲が良くなければ自分は良くなれないと考えたのである。これはスポーツの場でハッキリ表れる。チームワークを大切にする。個人競技でさえ勝っても自分の実力を誇示せず、皆様のお陰であるとする。この和を貴ぶことは普段の生活の中で、相手を尊重したり、意見を聞いたりすることに繋がり、そのことが礼儀や気配りなどに表れる。相手本位の生き方である。

人は社会的存在であるが、一人ひとり意見が違うから自己主張だけでは社会が成り立たない。意見が違うときどうするか。相手の意見と自分の意見を理解し、それらを考慮して最善案へ向かうことが和を尊ぶことである。宮本常一「忘れられた日本人」にそのような話し合いの例が出ている。

寄りあい場へいってみることにした。・・・いってみると会場の中には20人ほど板の間にすわっており、・・・うずくまったまま話しあっている。雑談をしているように見えたがそうではない。事情を聴いてみると、村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得がいくまで何日でもはなしあう。はじめには一同があつまって区長からの話をきくと、それぞれの地域組でいろいろに話しあって区長のところにその結論をもっていく。もし折り合いがつかなければまた自分のグループへもどってはなしあう。用事のある者は家へかえることもある。ただ区長・総代はきき役・まとめ役としてそこにいなければならない。とにかくこうして二日も協議がつづけられている。この人たちにとっては夜もなく昼もない。ゆうべも暁方近くまではなしあっていたそうであるが、眠たくなり、いうことがなくなればかえってもいいのである。・・・朝から午後三時まで[一つの課題の]話をしていただけではない。他の話もしていたのであるが、[私の課題の]話も何人かによって、会場で話題にのぼった。・・・それと関連のあるような話がみんなの間にひとわりせられてそのままに話題は他にうつった。しばらくしてからまた、[その課題の]話になったり[関連する話]というものもあった。するとまたひとしきり、[関連する話]の世間話がつづいてまた別の話になった。

・・・[これを繰り返している]いかにものんびりしているように見えるが、それでいて話は次第に展開してくる。・・・[区長がまとめて]それをよみあげて「これでよろございますか」といった。「はアそれで結構でございます」と座の中から声があると、区長は・・・（宮本常一、忘れられた日本人、岩波文庫、1984、p13。・・・は筆者による省略個所、[]は筆者の省略個所への注記。）

この「寄り合い」はローマ教のコンクラーベに似たところがあり、和を求める話し合いの方法の特長が出ている。これを昔流と呼ぶことにして、その手順を整理してみる。

- ① まず、問題点をはっきりさせる（共通認識を持つ）
- ② 次いで、いろいろな意見を集める（情報を共有化する）
- ③ それぞれの意見の良いところ、具合の悪いところを整理する
- ④ それをベースに意見を見直し、解決策・改善案を考える
- ⑤ 解決策・改善案に不具合があれば、再度①②から繰り返す
- ⑥ これを繰り返して最善案と思われるものを見つける

これに対して、現代の議論の仕方は以下ようになる。これを現代流とする。

- ① 自分の考えをはっきりさせる（自説の論拠を整理し、弱点を補強する）
- ② 自分の考えを発表し、相手の考えを聞く
- ③ どちらの考えが良いか論争する（自説の正当性を主張、相手の不備を指摘する）
- ④ 勝った方の案を採用する（具合の悪い点は修正する）

現代流の論争はどちらが正しいか勝ち負けをつけようとする。議論はそれぞれ自説の正しさを論証し、相手案の不備を指摘する方向へ行き衝突になる。修正は自説の不備を認めることだから、修正を避ける傾向が無意識のうちに出て、改善案が出にくい。初めに提出される複数の案は選択肢であり、最善策を考案するための素材ではない。そのため最善策には至らないことがある。現代流の根底には個人主義がある。

一方、昔流は皆が納得できる最善策を見つけようとする。勝ち負けではなく、皆が問題意識を共有し、同じ目標に向かい最善策を目指して知恵を出し合う。思考の方向が同じなので、争いを避けることができる。当初提出される複数の案は最善策を考案するための素材であり、これを元に改善策を考える。この方式には調整などに時間がかかる欠点があるが、共通した目標に向かって知恵を出し合うので、その時点での最善策を見つけられるという良い点がある。和を尊ぶ利点の一つがここにある。

現代の国会は現代流で議論をしているようである。だから、民主主義を建前として多数の議席を得て数で議案を通そうとする。これを昔流で議論するとどうなるだろうか。まず「国を良くすること」で議論の方向を確認し共通認識を持つ。次いで多くの提案の得失を議論し、それを元に最善案を作る。この方式は一見簡単に見えるが、実際は難しい。それは、方向は同じでも方法論は表-4 で見たように正反対のものがありうるからである。正

反対の案の調整は簡単には行かない、時間も掛かる。不断のコミュニケーションが大切になる。改善策として、この過程にはAIの活用が考えられる。議論が行き詰まりそうになれば、原点である議論の方向を再確認することが大切になる。この方式の特長は、なによりも国会の知恵を総動員して、最善案を作ることができることにある（これが本来の国会のあり方と思われる）。ついで少数の意見が尊重されることがある。さらに過半数という議員数はそれほど意味を持たなくなるから選挙への取り組み方が変わり、議員は本職の議案作成に全力を投入できるようになる。議員個人の手柄は分かり難くなるかもしれないが、国会の議論の方向は好ましい方向へ進むと思われる。まずは議論方法を合意することから検討を進めなければならないだろう。

「和を貴ぶ」とは、日頃からのコミュニケーションを大切にすることである。たとえば、混んだ電車で肩が触れ合ったとき不快を感じるのは、相手が知らない人だからである。もし親しい友人であれば、「混みますね」と一言交わすだけで終わり、不快感を覚えることはほとんどないだろう。これは、肩が触れたときの問題ではなく、普段からの付き合い——つまりコミュニケーションの有無による違いである。仕事でも同様である。商談の場だけでは、物事は円滑に進まないことがある。同じ釜の飯を食う、アフターファイブ、お祭りや地域の行事、面倒に思える日常的な交流を日本人は大切にしてきた。物事をスムーズに進めるためには、問題が起きてから対処するのでは遅く、日頃からのコミュニケーションが不可欠なのである。

しかし近年はそのコミュニケーションが劣化している。集合住宅では上の階の足音などの生活音に対する苦情が、当事者直接ではなく理事会に寄せられることがある。親しい付き合いがあれば、互いに注意し合い、また、多少のことには我慢もできる。しかし、付き合いがなければ、それはすぐに苦情へ変わる。「付き合いは面倒だ」「プライバシーが大切だ」「お金が掛かる」といった考え方が広がり、地域社会は崩壊へ向かっている（特に都市部で）。これは、後に述べる行き過ぎた現代思想の影響であろう。

同様な問題は国家間でも起こる。軍備増強競争も、突き詰めれば国家間のコミュニケーション不足による不信感から生じている。信頼関係のある国家間では軍備は無用である。コミュニケーション不足はお互いの価値観の違いが原因となる場合が多い。コミュニケーションの劣化は国家では戦争に行きつく。確かに「和」を保つには時間もコストもかかる。しかし、「いのち」を基準に考えれば、戦争によって多くのいのちが失われるよりもはるかに望ましいことは明らかである。兵器による脅迫で真の平和は得られない。平和は相互信頼から生まれる。殺すことが悪いという子供にも分かることを、大人は理屈をつけて行う。兵士を養成することは、人を殺しても何も感じない人間、さらには殺すことに意義を見いだす人間を養成することであり、それは人が人でなくなることであろう。これは進化と逆の方向である。理屈を考える現代思想が人類

を破滅へと向かわせるのであるならば、表-4 で見たようにあべこべの社会を作ってきた日本人の知恵は、人類存続、戦争を無くす方向への転換に役立つのではなからうか。

和は相手を尊重するが、行き過ぎると思考停止になり、横並びの傾向や相手の言うがままになる危険がある。これは避けなければならない。言うべきことは言うすなおさ(6)-6)も併せて大切である。

6)-5 良いものは取り入れ、改善して自分のものにする (最善を尽くす)

日本人はまねるのがうまい、とはよく言われるところである。しかし、ただまねるのではなく、より良い形に昇華させて日本流に変えて来たのである。例を挙げる。

漢字	⇒ 訓読み、かなの発明	(日本語を止めて中国語に切り替えなかった)
律令制	⇒ 律令・公地公民	(科挙,宦官,易姓革命は取り入れず、神祇官を置く)
仏教	⇒ 神仏習合	(哲学から人々の救済へ)
都市	⇒ 平城京、平安京	(城壁は取り入れず)
住居	⇒ 壁、ふすま、障子	(土足は取り入れず)

6)-4 の和を尊ぶことも元は中国の発想*で、「礼を行うため」には和が大切という意味であったが、日本人は和を広く「政治や社会の基本原則」とした。(※「和」は中国の礼記「礼は之れ和を以て貴しと為す」や論語「礼の和を用って貴しと為す(学而第一)」の言葉に由来する)。

次に、漢字や銃、律令制を例として、どのように日本流に変えたかを見てみる。
まず漢字について。

- ① 漢字を受け入れたけれども、日本語をやめて中国語に換えることはなかった。以下のような努力を考えると中国語に換えたほうが楽であったろう。
- ② 訓読みを発明した。訓読みは、入ってきた文字が英語の場合を想定すると、「dog」を「いぬ」と読むことだから、この発想は尋常ではできない。
- ③ 返り点などを工夫し、読み下し文を発明した。
- ④ 万葉仮名を工夫し、「表意文字」から「表音文字」を発明した。
- ⑤ 誰でも使える文字として、カタカナひらがなや小文字、濁点、半濁点を発明した。
- ⑥ 漢字とかなを併用し、かな交じり文を発明した。仮名だけでは使い勝手が悪い。このような工夫することは、現代でも続いている。
- ⑦ カタカナ英語、アルファベットを日本文中に取り入れた。この特殊性は英文中には漢字がないことから分かる。
- ⑧ ピクトグラムを改良(1964)し、絵文字(1999)を発明した。表形文字に戻ることには拘らず積極的に使用した。今や「emoji」は世界的に使われている。

「かな」は日本文化の性格を良く表している。良いものは「すなお」に取り入れるのである。中国では漢字を使うことは科挙に合格した進士の特権であった。そのため苦

労して獲得した進士の特権を守るために、漢字をますます難しくしていった。誰でも分かるようにはしなかった。一方、日本は文字を取り入れたものの、文字を易しくして誰でも使えるように工夫した。その結果、日本では識字率が高くなった。文字を易しくしたことの文化の発展に対する寄与は計り知れない。この過程から分かるように、古代日本は専制的ではなく民主的であり、ジェンダー問題も深刻ではなく女性はこのびのびと生きていた。源氏物語、枕草子は女性によって書かれた。万葉集は特権階級の歌集ではなく、身分の低い人の歌も取り上げている。歌に関しては平等である。誰でも参加できるという伝統は今日も歌会始として続いている。古代日本は格差の少ない社会であった。

銃は 1543 年に種子島に伝えられたが、それは急速に日本に広まり 30 年後の 1574 年長篠の戦で信長は鉄砲隊を使った。量産体制が短時間でできたのである（直ぐ作れるほどの技術が当時の日本にすでにあった）。しかし、銃は非人道的武器であると考え、武器の主力にはしなかった。信長が本能寺で討たれたとき、銃で身を守ることをせず、刀と槍が身近な武器であった。その後、1588 年秀吉は刀狩令で刀と銃を規制し、銃の開発はストップした。開国前の日本人は武器の殺傷能力を高めることに知恵を使わなかった。日本は昔から平和主義的だったのである。（一方、現代は非人道的武器という発想が衰退してしまっている。秀吉の朝鮮遠征は例外的事件である。）

律令制にも日本流の特長が表われている。中国から受け入れたものは①太政官、②律令（法令）、③公地公民制。受け入れなかったものは①易姓革命、②科举制、③宦官。日本独自に加えたものは①神祇官（祭祀を行う官庁）、②世襲制（職務は世襲だった）。日本の知識の導入は単純なまねではないのである。

しかし、明治の開国後は大きく変わった。それまでの日本のやり方から大きく逸脱して、思考を停止していろいろなものの導入に走った。武器の開発も世界と競争して行い、世界最大の戦艦大和も作った。結果、大切な命が多く失われた。

「良いものは取り入れ、改良して自分のものにする」ためには、取り入れて良いかを判断する目を持つ必要がある。自らの価値観を持たねばならない。また、変わることは進化の大切な一歩だが、これまでの自分を否定することでもあるので、「すなお」でなければ出来ないことである。

6)-6 すなおに生きる

すなおにはいろいろな意味合いがある。

- ① ありのまま受け入れる： これは、邪推しない、ひがまない、妬まない、見栄を張らないことを意味する。これは現状を維持するのではない。「そのまま」ではなく、ここには同時に最善を目指す姿勢がある、だから、ありのままを受け入れられるのであり、日本的なところである（次項 6)-7 参照）。

- ② 思い込みや自分の考えに執着しない： これは、正しいことは神のみぞ知る、とすることから来る。正しい、良い、真実—このようなことは実は人には分からない。良いと思ったことでも結果として悪くなることもあることは誰でも経験している。人には良いことが分からない。正しいとされた天動説も地動説に代わった。自分の思いに拘らず、いつも最善は何かと考える謙虚さがすなおである。
- ③ すべきことはする、すべきでないことはしない： 誰でも困っている人を見かけたら助けたくなる。そのとき助けるのがすなおである。私には人と会う約束があるのでなどと言いつつを言ったり、経緯やほかの状況等に左右されたりしないのである。怨親平等という言葉がある。怨みに思う人も親しく思う人も、怨みや恩を越えて区別せず平等に慈しむ心をいう。上杉謙信が武田信玄に塩を送った故事がそれである。敵味方の区別・差別をしない。そのすなおさが大切であることを知っているから、その古事が現代にまで伝わるのである。
- ④ 良いことを良いとする： 言った人や経緯などほかの状況等に左右されず、そのもので判断する。〇〇さんが言ったことだからいやだ、はすなおではない。内容で判断するのがすなおである。日本国憲法は押し付けられたものだから改定すべき、もすなおでない。経緯ではなく内容の良し悪しで判断するのがすなおである。
- ⑤ 過ちは正す： 間違っているけれどもこれまでの努力が無駄になるから続ける、はすなおでない。経緯やほかの状況等に左右されず、過ちは過ちとして認め正すのがすなおである。人は自分の信念が何かおかしいと気付いても、それを直すことをためらうものである。一つにはおかしいことに気付かない性向もあるが、気付いても日和見と言われるのを怖れて変えられない場合も多く見受けられる。すなおになるのは難しいことである。変えるためには自分の信念は絶対的なものでないことを知っておく必要がある。
- ⑥ 差別をしない： 差別や偏見は人が作り出したものである。現実には事実があるだけで差別は本来存在しない。「百獣の王ライオン」は差別好きな人の思い込みであり、ライオンがハイエナより上というのは人の考えである。事実を直視するのがすなおなのである。
- ⑦ 思いやりや善意を受け入れる： 相手の気持ちや思いやりを遠慮して拒否してしまう、これはすなおではない。過度の遠慮は不要である。善意を感謝して受け入れるのがすなおである。こうすることで、お互いが気持ちよくなる。
- ⑧ 言うべきことは言う： 周囲を忖度して言うべきことを言わない、はすなおでない。言い方には注意が必要だが、必要な意見は言うのがすなおである。

今の世の中「どうしたら得ができるか」で皆が血眼になっている。しかし、「すなお」という生き方がある。すなおとは、ひたすら最善を目指すところであり、自分の思いに捉われず、解放された精神で、作為を持たず、物事を自然体で行うことである。すなおなところにより他者との共鳴力が高まる。進化はこの共鳴力を高め、善を目指す方向に進んでいる。すなおはおてんとうさまのところを基準にすることから来る。(つづく)